

## 老年教育における記憶画学習プログラムの検討

— 感性的表象と主観的幸福感の観点から —

高橋 文子

The Examination of Memory Drawing Learning Programs in Gerontological Education:  
Through the Perspective of Sensitive Representations and Subjective Well-being

Fumiko Takahashi

### 要 旨

本研究は、記憶画を「形象」と「感性」の統合である感性的表象と捉え直し、内的な記憶像を「話すように描く」コミュニケーションツールとして活用できる記憶画学習プログラムの構築を研究の目的とする。そのために、2日制の記憶画公開講座と記憶画研究会のプログラム内容や作品群、そして主観的幸福感の観点等から検討する。具体的には、2019年と2021年に行った2回の講座とその間の記憶画研究会の活動内容を研究対象として分析・考察を行った。その結果、画材に慣れ親しんでスムーズな表象に至る手慣らしと後半に自由表出の時間を毎回組むことで、受動的選択から、能動的な記憶像の視覚化に迫るといふプログラムは有効に働いたことを感性的表象群から確認した。さらに記憶画作品例を3側面（内容的/形式的/形成的）で分析、検討することで、活用可能な美的な方法論的認識を得た。また、伊藤ら（2003）5領域15項目の指標を7項目に絞って行った主観的幸福感の値は、講座前後で高い水準で横ばいを示し、一般的に高齢者の主観的幸福感が高く示される傾向と同様であることが示された。

キーワード：記憶画、プログラム開発、感性的表象、主観的幸福感、老年教育、美的方法論

## 1. 序

### (1) 本稿の目的

記憶画に描かれる忘れられない題材は、事物だけでなくその場に居合わせた人や場の情趣を含むものである。高齢者の記憶を、筆者は地域資源として捉えており、その共有の一施策として記憶画講座を展開している<sup>1)</sup>。内的な記憶像はその土地や地域に根差し、語られたり、形を得て視覚化されたりすることで共有が可能となる。記憶画教育は明治期に正確な対象の再現を目指して臨画と併用して教育課程に組み入れられていたが、自由画教

育の復興の陰に姿を消した経緯がある。筆者の構想する記憶画再考論<sup>2)</sup>は、学習者の記憶表象の表現主題と個に即した表現過程を重視したものである。2017年に第1回の記憶画公開講座を行うに当たり「残したい記憶 絵日記のように絵と言葉で描く」というタイトルを付した<sup>3)</sup>。内的な記憶像を感性と形象の統合がなされた感性的表象として結実させる美的方法論の構築がこれらの講座を支えるものとなる。

幸福感は近年、国際的なトピックであり、様々な指標を用いて検証がなされている。主観的幸福感（SWB：subjective well-being）研究はアンケート調

査等による幸福度の定量化を図る手法を取る。1980年代から心理学の分野で研究対象と考えられるようになった<sup>4)</sup>。

加齢によって諸機能の低下が想定される高齢者において、どのような記憶画表出の道筋を提案できるだろうか。筆者は高齢者の記憶画創作を、美術教育に止まらない人生の豊かさといった観点から俯瞰したいと考え、本稿では主観的幸福感のいう観点からも分析を行う。研究対象者は自らの意志をもって記憶画制作に当たれる前期高齢者を想定した<sup>5)</sup>。本稿の目的は、高齢者対象の記憶画プログラムの開発のために、内的な記憶像を感性的表象として表す記憶画作品群と主観的幸福感調査を検討するものである。

## (2) 先行研究

高齢者の記憶画表象を支える研究領域は、単一ではなく、複数想定できる。堀薫夫、森玲奈らの老年教育は本紀要5号にて検討した。以下に本稿と関連のある老化、アートと昔語り、回想法といった観点から先行研究を記す。

### ① 老化

増本康平は、高齢期においては、後悔、健康状態の悪化、身近な人との別れ、社会的地位等の喪失、死や未来に対する恐怖や不安に直面して、程度の差はあるがすべての人が絶望感を抱くと論じている<sup>6)</sup>。そして、E.H. エリクソンの心理社会的発達課題を踏まえ、「高齢者の発達課題はアイデンティティの統合と絶望のバランスをとることである」と説く。また、自己と強く関連した自伝的記憶について「常に更新される動的な記憶」であり、過去の記憶を過去のものとして固定しない記憶の変容に触れている。この「生み出される記憶」の側面については、改めて検討する<sup>7)</sup>。また、自伝的記憶の感情調整機能について、ストレスフルなライフイベントを多く経験している高齢者の心理的安寧が、他の世代よりも安定しているという「エイジング・パラドックス」を指摘する<sup>8)</sup>。これらは高齢者だからこそ獲得したに感情のコントロール機能といえる

だろう。かつては50歳まで生きるとはまれであったために、脳は高齢まで使用するようには進化が追い付いていないという<sup>9)</sup>。加齢による老化は自然な退化であると共に、現代は進化の過程を更新している時代ともいえる。老化度は個人差があることを前提として、生活の質（Quality of Life）向上と健康寿命のために、老化危険因子として免疫機能、酸化ストレス、心身ストレス、代謝機能などが挙げられ、筋、血管、神経、ホルモン、骨等の当該年齢として示される<sup>10)</sup>。

兵頭和樹ら（2012）は、高齢者の認知機能を支える脳領域変化としては、加齢に伴う前頭前野の構造的・機能的変化を指摘している<sup>11)</sup>。具体的には、磁気共鳴画像法を用いて脳の構造を5年間追跡調査した研究では、一次視覚野など感覚を司る部位では萎縮が少ないのに対し、前頭前野では強く萎縮が進んでいることが確認されている。また、一過性の中強度運動はこれらの脳部位の萎縮を抑制するだけでなく、他の部位が代償的に助け合うかたちで作用することも指摘されている。身体活動が筋力低下の防止や生活習慣病の予防といった観点だけでなく、脳の高次認識機能を司る前頭前野や海馬に作用し認知機能の維持・改善に効果的であるという指摘は脳も身体であると気付かされる。

### ② アートと昔語り

横川善正は「ホスピスが美術館になる日」を記し、アートの側から新しいケアの在り方を模索する。「終わりを始まりへと引き継ぐ」境界神テルミヌスに導かれた哲学的考察から、ホスピス、ターミナルケア、ターミナルアート概念を論じる。ホスピスの患者は、日々懐かしい思い出の語らいとしての記憶のドロイングを行っているという<sup>12)</sup>。アートは痛みや苦しみを忘れさせる作用をもち、寄り添いの役目を果たすという横川の主張は、医学と芸術の境界を先見的につなぐものである。

画家鴻池朋子は、震災以降に新しいプロジェクト「物語るテーブルランナー」を創始する<sup>13)</sup>。これらは2012年秋田の森吉山阿仁の山小屋を美術館

にする着想から練られた。その土地の人々に個人的な体験を話してもらい、その話を聞きながら鴻池が絵を描き、その下図をもとにランチョンマットをつくり、長くつなげてその上でお茶を飲むという企画である。これは、筆者が協働的記憶画と呼ぶ語り手と描き手が異なる分業の手法であり、下図を立ち上げる難しさは全て作家に委ねられる。鴻池は幸せな話ではなく「皆さん固有の悲しい話、辛い話、驚いた話を聞きたい」と主題を限定している。「語りが次第に形になって目の前に現れ、手で触れられるモノになってくると、作り手が用いる布を花柄に変える等、色々と物語を操れるようになる」とも述べている<sup>14)</sup>。この対談記録には「絵のうら側に言葉の糸をとおす」というタイトルが付けられ、昨今支持体として動物の皮を用いている鴻池の表層に止まらない根源的な表象を求める感覚を読み取ることができる。

### ③ 回想法

福祉の現場で実践されている回想法について、志村ゆずの言説を取り上げたい<sup>15)</sup>。回想法は、過去を思い起こして話すことで精神を安定させ、認知機能の改善も期待できるロバート・バトラーが提唱した手法（ライフ・レビュー）を起源としている。回想法導入には、記憶を引き出す手がかりとして、昔の遊び道具や写真、当時流行した音楽や懐かしい食べ物などが準備される。レクリエーションや社会化の促進を目的とするグループワークの形をとり、聞き手は洞察や再構成を促さず、語り手の自発性を重要視する「一般的回想法」と、自我の統合を目指し聞き手は共感的・受容的に評価を促すように聞き、発達段階にそって時系列にたどられることが多い個別対応の「ライフ・レビュー」の差異を、志村は実践的な立場から示す。近年「思い出療法」と呼ばれている福祉施設における実践は、前述の一般的回想法である。また、1987年に設立され世界の回想法の先駆けであったイギリスのエイジ・エクステンジ・回想センター事例を挙げ、小学校において必修カリキュラムである「世代間交流」が創造的になされてきたことを指摘する。例えば

小学生と高齢者が昔語りにもとづいて回想劇を共同で上演する活動や回想内容を絵画にする活動等は、高齢者の記憶を尊重し視覚化するという本稿の問いと親近性をもつものである。

### (3) 問題の所在

先行研究を踏まえ、高齢者対象の記憶画プログラム開発について、以下の問題を設定した。

- ・記憶画の学びは、学習者に何をもたらすのか。
- ・記憶画講座及び記憶画研究会のプログラムから、学習者のどのような感性的表象が導かれたか。
- ・記憶画を学ぶ高齢者の主観的幸福感調査において、どのような解釈を導くことができるか。

## 2. 調査内容の検討

### (1) 幸福感を形成する要素

SWBは、主観的幸福感あるいは主観的健康感と訳され、それまでのどちらかというネガティブな傾向の心理学的、病理的な健康感ではなく、個人の主観的な判断が重視され、個人の認知的側面と感情的側面をもつ人生全般に対する満足を含む広範な概念である。

幸福感を形成する要素として、人間関係の豊かさ、健康度、日常生活能力、経済状態等様々な側面が想定できる。それらの主観的な quality of life (QOL) を評価する方法として、代表的なものが、PGC モラル・スケール (Philadelphia Geriatric Center Morale Scale) である。「心理測定尺度集」Ⅲ及びⅥによると、主観的幸福感には単一の尺度があるわけではなく、その信頼性と妥当性について、今なお検討されている<sup>16)</sup>。また、高齢者対象の研究においてその成果が報告されている<sup>17)</sup>。

幸福感研究は約40年程前の1980年前後に老年学の分野で始まる。昨今様々な発達段階で着手され、国立教育政策研究所より報告されているPISA2015年『生徒の well-being (生徒の「健やかさ・幸福度」)』は、10件法による調査結果である<sup>18)</sup>。

## (2) 主観的幸福感指標の検討

第1次質問肢検討において、PGC モラールスケール (Lawton, 1975) の17の項目を当たったところ「1: 人生は年をとるにつれ悪くなる」に始まる否定的な質問内容が頻出し、対象者に与える負担を考慮するとこの尺度での測定をすることは難しいと判断した。本研究では、伊藤ら (2002) の5領域15項目の指標から高齢の参加者がイメージしやすい7項目 (旧項目No. 1, 4, 9, 10, 11, 13, 14) に絞って、質問肢を設定した<sup>19)</sup>。項目①は「人生に対する前向きな気持ち (満足感)」、項目②は「自信」、項目③は「達成感」、項目④、⑤は「人生に対する失望感」、項目⑥、⑦は「至福感」の領域である。回答は、4件法 (「非常に: 4」「ある程度は: 3」「あまり思わない: 2」「全く思わない: 1」) とし、「失望感」は、逆転項目のため反転して加算する形で、数値処理を行った。

## (3) 質問紙調査

① **調査概要** 調査実施日: 2019年5月16日 / 調査方法: 自記式 (講座導入時20分程、補足説明を交えながら) / 調査対象: 第2回記憶画公開講座受講者 (14名) / 回収率: 100% (n=14) うち3名は初回講座 (2017) の参加者

② **質問調査項目** 質問項目の文言は以下ア~オとし番号順に質問紙に記載した

**ア (受講動機)** どのような思いから受講しましたか。

**イ (描画経験)** これまで描画に関してどのような経験をしてきましたか。(1~5から選択)  
レベル1: 自分から進んで絵を描くことはなかった。 / レベル5: 絵を描くことが普段の生活の中にあり、少しずつ続けてきた。

**ウ (描画材)** 様々な描画材の中で自分にあっているものに丸を付けましょう。(複数回答可)

1. 鉛筆、2. 木炭・ペンなど、3. 多色色鉛筆、
4. クレヨン・パス、5. 色鉛筆、6. 色コンテ、
7. 水彩絵の具、8. アクリル絵の具、油絵具

等 / 選択理由

**エ (表現様式)** 絵画の表現方法にはリアル (具象) ⇔ デフォルメ (抽象) という幅があります。書道でいうと真行草です。テーマに合わせてどんな表現様式で描きたいですか。 /

選択理由

**オ (幸福感)** について

選択肢: 1: 非常に / 2: ある程度は / 3: あまり思わない / 全く思わない

① あなたは人生が面白いと思いますか。

② ものが思ったように進まない場合でも、あなたはその状況に、適切に対処できると思いますか。

③ 自分がやろうとしたことは、やり遂げていますか。

④ 自分の人生は退屈だとか、面白くないと感じていますか。

⑤ 将来のことが、心配ですか。

⑥ 自分がまわりの環境と一体化して、欠かさない一部であるという所属感を感じることがありますか。

⑦ 非常に強い幸福感を感じる瞬間がありますか。

## 3. 調査結果

### (1) 事前調査の傾向の分析

#### ① 年齢構成

講座参加者14名の内訳は、60代が35.7%、70代が57.2%、80代は7.1%であり、70代の比率が最も高く、最高齢は84歳であった。性別構成は、女性71.4%、男性28.6%であり7:3の比率であった。

#### ② 記憶画講座受講の動機

受講の動機は、記憶画への興味、描画欲求、描画技能習得欲求の3要因に集約された。以下に回答例を示す。

・ **記憶画への興味**: 昔の記憶を遡って記憶を描く“記憶画”が殆ど知られていない実態と共に、講座の趣旨「残したい記憶を絵日記のように描く

記憶画講座」が共感をもって受け入れられたことを確認した。「記憶画」とは初めて知ったジャンル。子供の頃を思い出してお絵かきするのも楽しいと思って」(70歳女性)

・描画の欲求：素朴な描画の欲求であり、2人共に男性であった。「絵を描いてみたくなったので」(70歳男性)、「絵に集中する時間をもちたかった。」(68歳男性)

・絵を描く技能の習得：描き方を習得したい、自分史や日々のイラストに活用できるようになりたいという意欲と目標をもって参加したことを確認した。「簡単に絵を描く方法を教えてくれるのかと。」(76歳女性)、

③ 描画経験

義務教育を終えてからの描画に関する経験について、殆ど絵を描く事がなかったレベル1は、42.9%と最も高く、次いで中間のレベル3が28.6%、生活の中に絵を描くことがあったレベル5は14.3%であり、レベル2とレベル4が各7.1%と分散した結果であった。

④ 自分に合っていると思われる描画材

選択数は1~4つの幅があり、一人平均2つの画材を選択した。鉛筆、色鉛筆、水彩絵の具は、それぞれ50% (7名) の支持があり、その理由として、「重ね塗りがしやすく手頃」「身近にあるので」

「描きやすい」「机の上で場所を取らない」「時間をたくさん要さない。」「すぐ描ける」等、馴染みのある「鉛筆、色鉛筆、水彩絵の具」はすぐ手に取れる画材として、さらにその魅力を共有していく必要について確認した。

⑤ 描画スタイルに関する嗜好

絵を表す場合、強調や省略はテーマに合わせて取捨選択されるものである。ここではリアル⇔デフォルメの個人のし好がどのようなものか把握する意図から、設定した。傾向として、「指標1」リアル志向が5名と最も高く、順に「指標2」のどちらかというよりリアル志向が4名、総数は9名、64%に上った。戦前の教育を受けた世代であるため、「描画＝見たままを描く」志向であることは予想に固くない。一方、デフォルメの選択した理由について、「やったことない」「正確な描写が苦手であるから」という未経験、及び消去法による理由等から、デフォルメの学びを積み上げることで本来の主題に基づいた表現を自分のものにする可能性を確認した。

⑥ 主観的幸福感

表2の主観的幸福感調査の平均値は指標1から順に約「3.2、3.3、3.1、3.5、2.9、2.9、3.1」を示し、平均値が低かったのは、指標6「所属感」、次に指標5「将来の不安」であった。グラフは、への字型と右下がりの一直線の二種を確認した。一直

表1 主観的幸福感事前調査結果

No.	指標内容	記憶画講座/受講生								伊藤ら調査(2003)		
		4 (全く思わない)		3 (あまり思わない)		2 (ある程度は思う)		1 (非常に思う)		高齢者 (N=14)	学生 (N=520)	社会人 (N=1001)
		度数	相対度数 (%)	度数	相対度数 (%)	度数	相対度数 (%)	度数	相対度数 (%)	平均値	平均値	平均値
1	人生に対する前向きな気持ち	4	28.6	7	50	1	7.1	0	0	3.19	2.98	3.01
2	自信	5	35.7	6	42.9	1	7.1	0	0	3.33	3.25	3.41
3	達成感	3	21.4	10	71.4	1	7.1	0	0	3.14	2.82	2.95
4	人生に対する失望感①	8	57.1	5	35.7	1	7.1	0	0	3.5	2.58	2.89
5	人生に対する失望感②	4	28.6	5	35.7	3	21.4	1	7.1	2.89	1.84	2.28
6	至福感(所属感)①	3	21.4	6	42.9	3	21.4	1	7.1	2.85	2.47	-
7	至福感②	6	42.9	4	28.6	3	21.4	1	7.1	3.07	2.93	-
	7指標総計									21.07	18.87	

線を示した指標4と7は、「非常に思う」4の回答を選択している方が最も多く、強く前向きな姿勢を確認した。最も高い値は、失望感に関する指標4の「人生は退屈で面白くない」という問いかけに対する、57.1%の否という反応であつた姿勢等においても、肯定的である。特に指標7の至福感

がりの一直線のグラフを示し、指標4と共に受講生の強い感情が伺えた。先の伊藤らが示した学生の7項目総計が18.87に対して、本調査の総計は21.07を示し、指標1~7の各項目も上回る結果であった。

これは、増本らが指摘する若年者はポジティブ

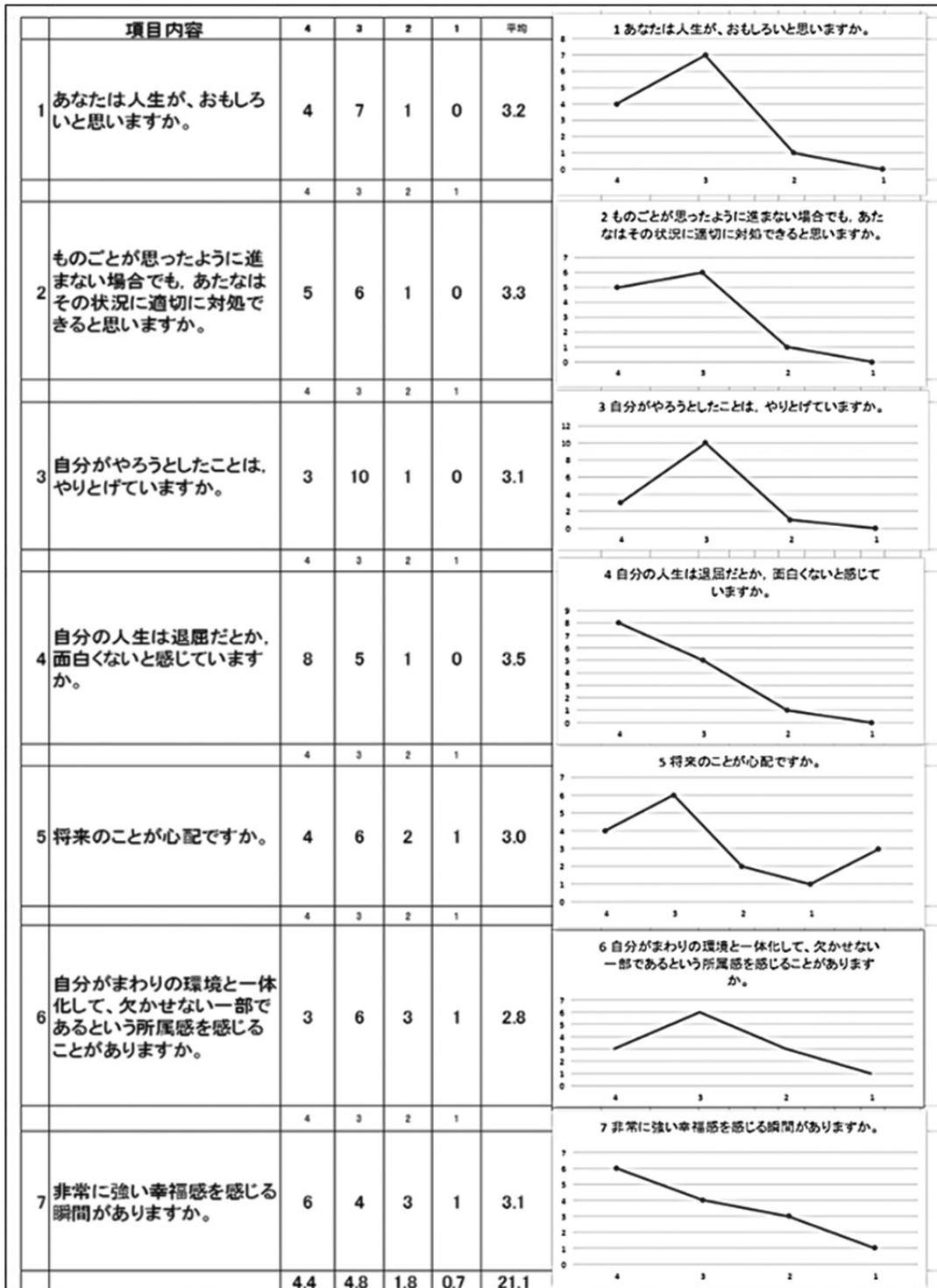


図1 主観的幸福感事前調査結果 (グラフ化)

な情報よりもネガティブな情報に意識を向けやすく、高齢者は正に絶望と統合のバランスを取りながら寛容であり、感情のコントロールに長けているという言説に合致した結果であった。

(2) 事後調査の分析

① 主観的幸福感比較

5月の講座、6月～11月の研究会（10回）を経た参加者の主観的幸福感の変化については、回収できたデータが半数（n = 7）であるものの、ほぼ横ばいの結果であった。

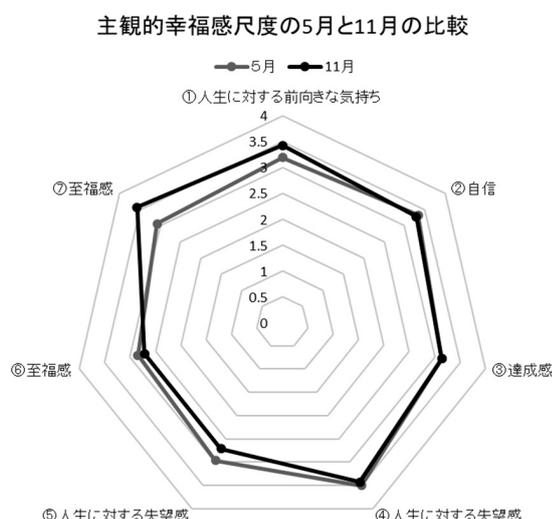


図2 主観的幸福感前後比較

指標1「人生に対する前向きな気持ち」は、3.2から3.4へ上昇、指標2の「自信」については3.3から3.3で横ばい、指標3達成感についても3.1から3.1でありほぼ同一、指標4「人生に対する失望感-1」は、3.5から3.4に、指標5「人生に対する失望感-2」も2.9から2.7、指標6「至福感-1（所屬感）」は2.9から2.7と減少を確認した。指標7「至福感-2」は3.1から3.6と0.5ポイント上昇が見られ、総計は高い水準を保ち21.1から22.3と上昇した。

② 描画材の志向比較

その他、特に顕著だったことは、自分に合う画材選択が平均2から3.7に増えたことである。特に水彩絵の具、クレヨン・パスの選択数は70%に達し、習熟が多少なりとも図られたことを確認した。これらは、ただのモノとしてではなく自己表出のツールとして働いたことに意義がある。

描画経験と表現様式、描画経験と各主観的幸福感項目との相関はいずれも見られなかった。

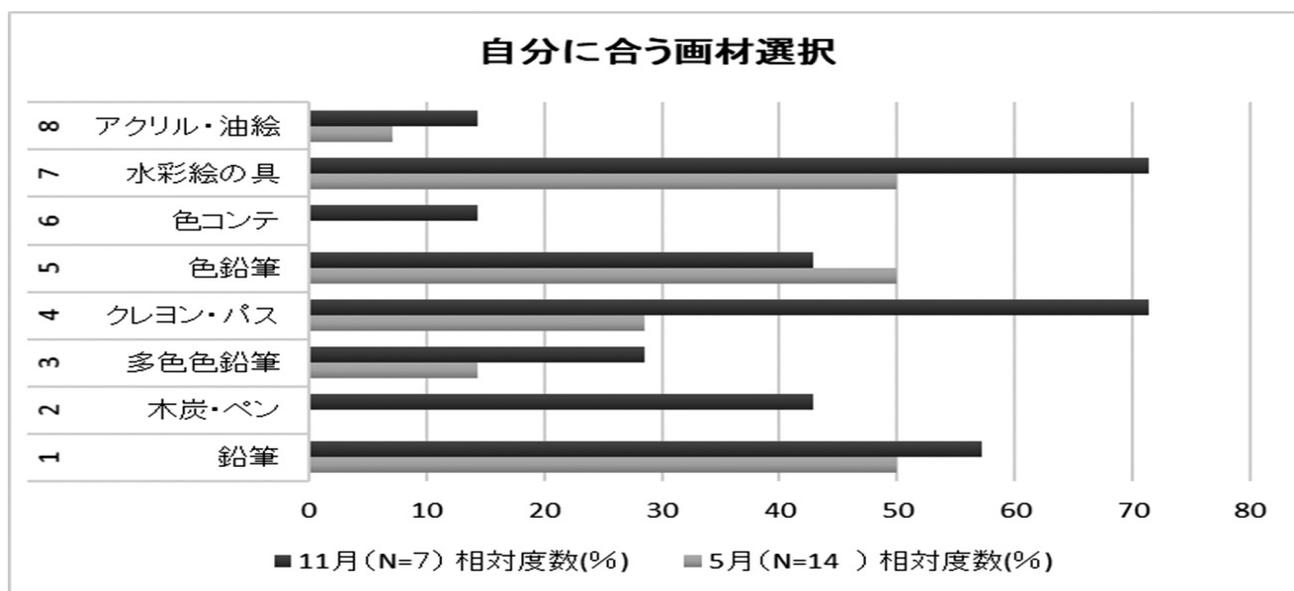


図3 自分に合う画材選択比較（2019年5月と11月）

### 4. 高齢者記憶画プログラムの実際

#### (1) 2019年5月の記憶画公開講座の概要

足立区生涯学習センター共催記憶画公開講座は筆者と記憶画家新見睦<sup>20)</sup>が講師を務め、東京未来大学図工室を会場に2019年5月14日/30日の両日、13時半から16時半の日程で開催された<sup>21)</sup>。

初日は14名、2週間後の二日目は15名の参加があり、途中休憩をはさみながら、講話と活動に集中した。講座内容は、新見の記憶画鑑賞後、「江の島の海」の作品をモデルとして、海を描く諸要素を学び、砂浜部分は思い思いの場面を描き加えるという流れを設定した。二日目は個別にあらかじめ選んでおいた新見の記憶画を基に描き、後半に高橋よりかつてのボア・ボードランの示唆した人間の記憶を描く力の可能性の講話や記憶スケッチの描画体験などを行った。両日とも、希望者には下書き済の用紙が選択できるようにして、色鉛筆やクレヨンを用いての重ねぬり等彩色の学びと新見の記憶画を見て引き出される回想が中心となる教育内容であった。

休憩をはさみながら、講話と活動に集中した。講座内容は、新見の記憶画鑑賞後、「江の島の海」の作品をモデルとして、海を描く諸要素を学び、砂浜部分は思い思いの場面を描き加えるという流れを設定した。二日目は個別にあらかじめ選んでおいた新見の記憶画を基に描き、後半に高橋よりかつてのボア・ボードランの示唆した人間の記憶を描く



図4 海の記憶画群  
※海の彩色は共に、右下部分は自由創作部分

表2 記憶画研究会(10回)の教育内容

研究会プログラムの詳細	各国の教育内容
① 6月28日 1. 手ならし 2. 左手で猫を描く(クレヨン) 3. 自由表出 (公民館で見かけたカエル)	■描画材に親しむ(クレヨン) ■意外性のある表出を味わう。 :四切画用紙に利き手と反対の手で「猫のイメージ」を描くことで
② 7月12日 1. 筆ペンで手ならし 2. ぐるぐる描き(ビステル) 3. 自由表出(川遊び)	■描画材に親しむ(筆ペン/ビステル) ■線の強弱を意識する:大正時代の鳥や動物の略画(藤五代策)を見て描くことで。 ■塊で人物を捉える:面をぬり込みながら。
③ 7月26日 1. 印象派風スケッチ(色鉛筆) 2. 印象派風スケッチ (オイル/ビステル, 色コンテ) 3. 自由表出(らくだに買った)	■描画材に親しむ(色鉛筆/クレヨン) ■引き立て合う色の存在と効果を知る:異なる描画材で2枚, 補色対比を用いて果物(玉ねぎ, レモン, りんご)を描くことで。
④ 8月9日 1. 外周から描く 2. 蓮の花の記憶スケッチ 3. 彩色 4. 自由表出(白い顔)	■描画材に親しむ(色コンテ/多色色鉛筆) ■手ならし:外側からの白抜きで円をつくる ■観察力と描写力を鍛える:蓮の花の記憶スケッチと見て描くスケッチをすることで ▼彩色は(記憶/見て描く)の選択にすばかであった。
⑤ 9月6日 1. 水彩 草 2. 混じり合い円形 3. にじみ絵 4. 自由表出 (姉妹3人で行った映画館)	■描画材に親しむ(水彩絵の具) ■混色の基礎技法を習得する:黄色と青を中心とした緑色をつくる様々な混色, 草を描く筆の勢い, 水加減の体感を通して ▼2は思った効果と異なり, 負期待があった。透明色の扱いにするとよい。
⑥ 9月20日 1. ペトペト絵の具で 花 花火 2. 自由表出 (上野の真永寺)	■描画材に親しむ(水彩絵の具) ■筆のタッチのバリエーションを学ぶ:水加減の少ない溶き方で, 筆のはらと勢いを用いて花火を描くことで
⑦ 10月4日 1. 葉っぱを描く 色鉛筆→グアッシュで 2. 自由表出 (picnic 雪道の登校)	■描画材に親しむ(色鉛筆, 水彩絵の具) ■記憶像の視覚化 ■植物の形態の美しさや色合いに目を向けて表像につなげる:色鉛筆でよく観察して描く, 次に下書きせずに筆の面を生かして
⑧ 10月18日 1. 絵はがきから 画材を選んで 水彩 オイル/ビステル他 2. 自由表出 (船と毛布と少年, Winter Memories)	■描画材に親しむ(色鉛筆, 水彩絵の具) ■記憶像の視覚化 ■同系色と反対色の色遣いを学ぶ:絵画の絵葉書の部分模写, 反対色を色の効果を確認しながら,
⑨ 11月6日 1. 炎の拡大画(ビステル) 2. 樹木(明, 固有色, 暗3色に分けて描く) 3. 自由表出(大昔の日曜午の静画)	■描画材に親しむ(ビステル, 水彩絵の具) ■記憶像の視覚化 ■明暗を色で描き分ける手法を体感する:基本色の緑に肌色, 藍色を混ぜた明色, 暗色をつくり樹木を描くことで
⑩ 11月22日 1. 紅葉を様々な画材で 2. 自由表出:(干し柿づくり ペンでスケッチ, 東京タワー, 英国の古城, 母と共に)	■描画材に親しむ(オイル/ビステル, 水彩) ■記憶像の視覚化 ■重ねぬりの効果を生かして描く:視点を近づけたり離したりして紅葉を描くことで

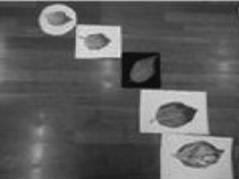
記憶画研究会Vol1~10				
				
①6月28日 ★前を大きく動かして:利き手でないほうで筆を握く(クレヨン)	②7月12日 ★筆ペンで手ならし線の強弱を覚悟する。①大正時代の鳥や動物の線画を見て描く。	③7月26日 ★引き立て合う色:①補色対比を用いて果物を描く。(色鉛筆バージョン、クレヨンバージョン)	④8月9日 ★季節の色 蓮の花をテーマに:①外側からの白抜きで形をつくる 円など	⑤9月8日 ★筆の勢い、混じり合う色 ①草
				
	②面で描く人物(色鉛筆・カーレーバステル)	玉ねぎを色鉛筆とクレヨンで	②メモリーローイング(蓮の花)	②混色円
				
自由創作:公民館で見かけたカエル	③マイワーク:川遊び	②マイワーク:らくだに乗った	③自由創作(蓮のメモリーローイング)	マイワーク:姉妹3人で行った映画館
				
⑥9月20日 ★輪郭を描かず ペトペと紙の肌で	⑦10月4日 ★画材の表情 ①葉っぱを描く	⑧10月18日 ★紙はがきから 画材を選んで(水彩)	⑨11月8日 ★明暗色で描き分ける ①炎	⑩11月22日 ★季節の色
				
①花 ②花火	②色鉛筆+グアッシュで	オイルパステル他	②樹木(明、固有色、暗3色に分けて描く)	①紅葉を様々な画材で
				
①マイワーク(上野の真水寺 蓮池)	③マイワーク(ペンと色鉛筆で)	②マイワーク(船と毛布と少年)	③マイワーク:大雪の日黒牛の除雪	②マイワーク(母と共に)

図5 「ゆっくり記憶画を描く」研究会プログラムと作品画像30(縦組3枚×10回 1、2枚目は手慣らし課題、3枚目は記憶画)

力の可能性の講話や記憶スケッチの描画体験などを行った。両日も、希望者には既に下描きが済んでいる用紙を選択できるようにして、色鉛筆やクレヨンを用いての重ねぬり等彩色の学びと新見の記憶画を見て引き出される回想が中心となる教育

内容となった。

(2) 2019年6~11月の記憶画研究会の教育内容受講生の振り返りに「学校のいわゆる図工室で受講できてよかった。受講料が高くなかったので

参加できました」という高齢者の懐事情が垣間見られるものがあった。改めて高齢者の学びが参加型であり、様々な事情を慮った。次のステップとして、さらに学びたいという84歳の方のために待たなしで、無料の記憶画研究会という形で翌月末に実施に至った。月に2回、6月末～11月末に全10回計画した。

教育内容については、まず画材に慣れ親しんでスムーズな表象に至る手慣らしと後半に自由表出の時間を毎回組むことで、受動的選択から、能動的な記憶像の視覚化に迫るという2つの柱を設定した。総括すると「体感的な線の強弱や塊でとらえるタッチの感覚 / 混色 / 同色系 / 反対色 / 明暗色等引き立て合う色の効果 / 水彩の水加減や重色など / 微細な力加減を通して目の前に出現し、次第に自身の感覚、感情が重なって主張のある表現が生み出されること」に集約された。作品における感性と表象の融合は、プログラムの工夫と教師の働きかけをきっかけとして胎動を始めるが、それだけでは不十分である。自身が触れて操作する描画材や素材との一体感が生じる。そ「フロー効果」「ゾーンに入る」等とも称されるこれらの一体感が主軸となり方法論の獲得をもたらすことを確認した。

色や形を立ち上がらせる画材としては、先のアンケート調査で自分に合っていると思われる描画材のトップ3である「鉛筆、色鉛筆、水彩絵の具」だけでなく、「筆ペン、カーレーパステル、49色のオイルパステル、コヒノールのマーブル色鉛筆」等も加えた。

これらのツールを生かすのが構想である。休憩時間にお茶を飲みながら出た話が、後半の自由表出の時間に形を得ることも度々あり、記憶をたどって過去を見る望遠鏡を手にしたような様子で活動が促進された。

### (3) 2021年2月第3回記憶画公開講座の教育内容

コロナの影響で2020年は全く活動できず、2021年2月に第3回目の公開講座が実現した。今回は

構図を教育内容として、今回は特に構図について、様々な資料を参照しながら学ぶことをとフライヤーで呼びかけた。最終的にコロナ禍の状況の下、30代1名、60代2名、70代6名、計9名申込みがあり、実施に至った。授業刺激としては、狩野派を始めとする日本画の4流派で構成されている「日本の花鳥」トランプを拡大してコピーしたものを手慣らしのモデルとし<sup>22)</sup>、構図関係ではアニメーション関係の「ヴィジョン」という図版から「構図を支えるライン」や同一構図で異なる色彩を施した資料を提示した<sup>23)</sup>。(図2 右図)、その結果、構図のモデルから記憶の一コマを想起する活動となり、図4の動性の強い感性的表象が導かれた。

受講生からは以下のような事後アンケートの記述内容を確認し、特に、「観察」「重色」「反対色を生かした配色」「構図を支えるライン」等の教育内容が自覚され、満足度の高い結果となった。

「A：観察の大切さを学びました。今更ながらにいい加減に物を見ていることを実感」

「B：色を重ねるおもしろさを学びました。」

「C：色の反対色等の講義、全体の配色や構図を考えることは今まであまりしていませんでしたので、今後の参考にしたい。」

「D：構図を支えるライン…少しわかりました。消失点の描き方をもっと知りたいです。」

「E：江戸期の花鳥画の模倣もとてもおもしろかったです。家のある風景画の配色、色づかいであれ程違うイメージになってしまうのに驚いた」(傍線筆者 / 自覚された教育内容)

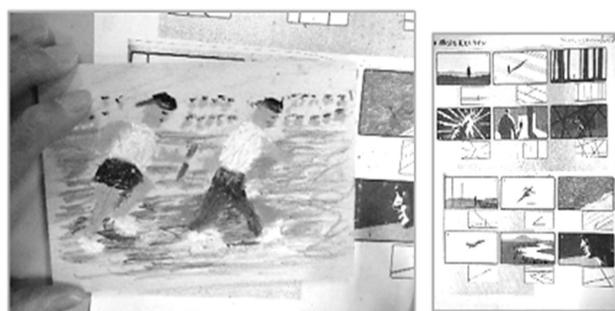


図6 構図を学ぶプログラム作品例(左図)と資料画像(右図)



上段：図 7-1 記憶画作品例①（四切画用紙） 図 7-2 記憶画作品例②（十六切水彩紙） 図 7-3 記憶画作品例③（A4 色画用紙）  
 下段：図 7-4 記憶画作品例④（A4 画用紙） 図 7-5 記憶画作品例⑤（十六切水彩紙） 図 7-6 記憶画作品例⑥（A4 画用紙）

## 5. 感性的表象としての記憶画分析

最後に記憶画講座において創作された記憶画群を、感性的表象を支える「内容的側面 / 何が描かれているか（意味内容）」、「形式的側面 / どのように表されているか（色彩・形・構図）」、「形成的側面 / どのように制作されているか（材料・技法）」の側面から分析・検討する<sup>24)</sup>。

### 記憶画作品例①（図 7-1）

**内容的側面**：研究会の第 1 回の手習しで「左手で描く猫」という課題から生まれた A さんの故郷新潟で幼い時に体験した「怖い猫」の主題感情が、象徴的に表されている。

**形式的側面**：ふてぶてしい 3 匹猫の顔面が誇張して描かれている。ぶち猫の白黒と舌の赤の限られた色数である。

**形成的側面**：引き付けられるクレヨンの粘性を生かした厚みのある画面であり、終始力強い筆致で制作された。

### 記憶画作品例②（図 7-2）

**内容的側面**：最高齢の B さんは、故郷鹿児島

**形式的側面**：自分がいる浅瀬から四方を見渡してパノラマ的に表したいという壮大な構想の鉛筆スケッチである。

**形成的側面**：描画スタイルとしてリアルに描くこと志向しているものの、言葉とアイデアのメモに止まり、感性的表出には至っていない。

また、戦後間もなく満州から引き揚げの際の幼少時の記憶は、海と船と毛布だけで、毛布にくるまる少年時代の表現構想にも引き込まれた。他者による表象化を検討する。

### 記憶画作品例③（図 7-3）

**内容的側面**：C さんの故郷福島会津の残したい記憶は、小学生の時に大雪が降り、父親が黒牛に丸太を引かせて除雪し、その後ろを近所の子ども達と一列に並んで登校した人間愛の絆が描かれている。

**形式的側面**：雪が見えやすいように、茶色系の色画用紙に色鉛筆やオイルパステル描くことを勧めた。

**形成的側面**：それぞれの形を明確に捉え、丁寧な筆致で制作された。

#### 記憶画作品例④ (図 7-4)

**内容的側面** : Dさんは、3姉妹で初めておしゃれをして映画館に行って、大きなイスに座って映画を見た楽しい思い出を描いた。

**形式的側面** : 小さな子どもの姉妹と当時の映画館の大きなイスの場の構図に幼かったDさんの視点が示されている。

**形成的側面** : おしゃれをして出かけた様子がわかる洋服をクレヨンの細かな筆致で表している。

#### 記憶画例⑤ (図 7-5)

**内容的側面** : Eさんは「こじかのバンビ」を歌った頃の小学生の頃の日常の温かな交流を、4コマの構成で伝える。

**形式的側面** : 最低限の要素を空間に配置し、その輪郭線をペンで描き、淡い彩色が施されている。チューリップや鳥を添えることで場のイメージを彩る。

**形成的側面** : 細い丁寧なラインで対象を捉え、淡い色彩が詩情を添える。

#### 記憶画作品例⑥ (図 7-6)

**内容的側面** : 「コロナ禍の下ストレッチ教室は屋外で実施。近くの隅田川遊歩道でウォーキングと体操。美しい鴨たちの群れ遊ぶ光景に見とれながら」という添えられた短文に表された内容が示されている。

**形式的側面** : 色鉛筆を用いて近景、中景、遠景を効果的に描き分けている。

**形成的側面** : Fさんは絵日記のような日常の一コマを、対象物だけでなく体操する人々の周りの要素も取り入れて強弱のある筆致でつなぎ、場の空気感をも演出している。

以上のように、複雑な感性的表象の重層性を、分析指標の3側面から整理した。それぞれの側面は互いに絡み合い、感性と形象を繋げ、内容的側面からは「表現主題・表わされているもの (what)」を、形式的側面からは「その作品の様式 (How)」の効果を、形成的側面からは「手の操作により作者の志向性が加わった変容」の事実を確認した。これらは個人の美的方法論的認識に止まらず、さ

らに分析、検討を続けていくことで、記憶画創作の方法論として類型化が可能である。

子ども時代の思い出は、人生を木の年輪に例えると根幹部分であるために、それらを語り合うことは、かけがえのない人生を肯定することになるという。記憶画を創作、共有する過程での学習者間の学び合いの作用も強く確認した。紙面の関係し省察についての考察は割愛する。

記憶画に取り上げられている昭和は近代化へまっしぐらの時代であり、不自由な生活から便利な世の中への移行が反映されているものの、本作品群の主題となるのは目に見えない「愛着」であった。記憶画はそういった主題感情が得やすく、感性的表象に移行しやすい性質をもつことを確認した。

## 6 結論

老年教育における記憶画学習プログラムに関する問題の所在に関して、以下の結論を得た。

- ・ 画材に慣れ親しんでスムーズな表象に至る手慣らしと後半に自由表出の時間を毎回組むことで、受動的選択から、能動的な記憶像の視覚化に迫るという2つの柱は有効に働いたことを表象群から確認した。「体感的な線の強弱や塊でとらえるタッチの感覚 / 混色 / 同系色 / 反対色 / 明暗色等引き立て合う色の効果 / 水彩の水加減や重色など / 微細な力加減を通して目の前に出現し、次第に自身の感覚、感情が重なって主張のある表現が生み出された。
- ・ 記憶画表象は、「愛着」を核とした記憶の形象化を引き出しやすく、それらを共有する場において、共感的な親和性を確認した。更に記憶画例を3側面 (内容的 / 形式的 / 形成的) で分析、検討することで、活用可能な美的な方法論的認識を得た。
- ・ 伊藤ら (2003) 5領域15項目の指標を7項目に絞って行った主観的幸福感の値は、講座前後で高い水準で横ばいを示し、これは、若年者はポジティブな情報よりもネガティブな情報に意識を向けやすく、高齢者は絶望と統合の

バランスを取りながら寛容であり、感情のコントロールに長けているという通説に合致した結果であった。

註

- 1) 2022 (令和4) 年度は、コロナ禍による2年間の休止を経て、「てのひら記憶画研究会」と名称を改め、4月～9月にかけて10回の学習会を設定した。掌に乗る小さな紙片の描画イメージである。
- 2) 高橋文子「記憶画の形状ストック指標における形象レベルと感性レベル：モデルの有無による記憶表象の検討」『美術教育学』（美術科教育学会誌）2018、pp. 185-196.
- 3) 高橋文子「老年教育における美術教育内容の研究Ⅰ——記憶画に関する公開講座及びデイサービスにおけるワークショップの実践から——」『未来の保育と教育——東京未来大学保育・教職センター紀要』、第5号、2018、pp. 55-63. 高齢者対象の実践的教育内容を「色や形の組み合わせやタッチの仕方、感覚、感情を伝える主張のある表現が生み出されること」を形成的観点から総括した。
- 4) 前野隆司『幸せのメカニズム実践・幸福学入門』講談社現代新書、2013、pp. 33-34. 前野は幸福に影響する4因子として「自己実現と成長」「つながりと感謝」「前向きと楽観」「独立とマイペース」を挙げている。
- 5) 太田信夫・多鹿秀継編著『記憶の生涯発達心理学』第4部高齢者の記憶（石原治 1章高齢者の記憶の特徴）、北大路書房、p. 273  
 なお、高齢者の年齢区分は、厚生労働省の医療制度から65歳を過ぎると高齢者として扱い、75歳未満を前期高齢者、75歳以上を後期高齢者と呼ばれる。石原らは、この括りは発達心理学的にも意義があるとしている。
- 6) 増本康平『老いと記憶 加齢で得るもの、失うもの』中央公論新社、2018、pp. 161-162.
- 7) 同、pp. 152-185
- 8) 松田修編『最新老年心理学』（第7章高齢者の自伝的記憶）ワールドプランニング、2018、pp. 103-105.
- 9) 養老孟司他『ブレインブック 見える脳』南江堂、2012、p. 206
- 10) 米井嘉一「総論 老化度と老化危険因子」『アンチ・エイジング医学——日本抗加齢医学会雑誌』 Vol. 2 No. 1、pp. 16-20.
- 11) 兵頭和樹・征矢英昭「高齢者の認知機能を支える脳領域変化」『体育の科学』 Vol. 62 No. 3、2012、pp. 194-199.
- 12) 横川善正『ホスピスが美術館になる日——ケアの時代とアートの未来——』ミネルヴァ書房、2010、p. 14

- 13) アーティゾン美術館展覧会『ジャムセッション 石橋財団コレクション×鴻池朋子 鴻池朋子 ちゅうがえり』2020年6-12月 新型コロナウイルスの影響により会期が延長された。
- 14) 鴻池朋子、大竹昭子、堀江敏幸『絵のうら側に言葉の糸をとおす』カタリコ文庫、2020、p. 22
- 15) 志村ゆず「回想法とライフ・レビューの実践の展開」『教育老年学の展開第10章』、2016、pp. 192-211.
- 16) 堀洋道、松井豊 2001「心理測定尺度集Ⅲ 心の健康をはかる“適応・臨床”」、堀洋道、松井豊 2001「心理測定尺度集Ⅵ 現実社会とかかわる“集団・組織・適応”」において、Ⅵ-199：主観的幸福感尺度（伊藤ら、2003）が取り上げられている。
- 17) 高橋一公 2018「高齢者の学習動機と主観的幸福感に関する研究」東京未来大学モチベーション研究所報告書 第7号 pp. 2-9
- 18) 国立教育政策研究所 OECD 生徒の学習到達度調査（PISA）2015年調査国際結果報告書『生徒の well-being（生徒の「健やかさ・幸福度」）』について 2016 <[https://www.nier.go.jp/03\\_laboratory/pdf/press\\_20170419.pdf](https://www.nier.go.jp/03_laboratory/pdf/press_20170419.pdf)>、2022年5月18日閲覧
- 19) 伊藤裕子 2003 「主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討」心理学研究 第74巻 第3号 pp. 276-281.
- 20) 新見陸『私の記憶画 書き残したい昭和 第一集 戦中戦後のこども』工房にじのかけはし、2014
- 21) 2019年と2021年の公開講座フライヤーを示す。



図8 第2回及び第3回記憶画公開講座フライヤー

- 22) 京都・福井朝日道 浮世絵トランプ「日本の花鳥」①狩野派、②琳派、③円山・四条派、④四季の花鳥画の図柄で構成されている。図版は小さいので、同じ数字毎に拡大して資料とした。
- 23) ハンス・P・バッハー 2019「Vision ヴィジョン——ストーリーを伝える：色、光、」ボンデジタル
- 24) 金子一夫 2019「図画工作科・美術科教育の基礎」学術書院 pp. 6-7.

**付記**

本稿は 2021-2024 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) No. 21K02502 の研究成果の一部である。

**謝辞**

調査に協力していただいた受講生の皆様に多大な感謝を申し上げます。

(たかはし ふみこ) 東京未来大学